

91 東京法学院大運動会の光景

〔法学新報〕第八六号 明治三十一年五月二十日〕

○法学院大運動会の光景

人情は物が生ずるを喜び。物が滅するを嫌ふものだ。然るを「人在野」と云ふ。温たかい風が薄ぎぬを吹き返し。折節は時ならぬ雪を飛ばすと云ふ。好時節なれば。飛鳥山といはず。墨堤といはず。小金井上野といはず。都人士は凡て甘き集ふやうに。とは新聞や雑誌が毎号のやふ。世話がつて呉れ。古道具屋では。瓢箪ひょうたんが二割方の騰貴だ。とは車夫の辻文句なり。さなきだに散策たがる書生連中には。思ひ半に過ぐるものありさ。所へ以て来て当法学院の三学年が中心となつて大運動会を催さんとの新考案が。二学年から一学年と。静な水へ小石を投けて。

其波紋かすん／＼と広がるように広がつて来て。其処で委員か二十名も瞬間に出来て。奥田藤田の両幹事へ。演^{マツ}の真砂の数々か寄せかゝつて。とう／＼重ひ頭を立に振らせた。委員は満悦で幾多の時間を費して。余興は何々兵糧は斯々と。福引籤の沢山と捻つて。やつと万端整頓を告げれば。廿日の十時頃であつた。会^{◎◎◎}の期日は何時か。年[◎]は三十一年。月[◎]は四月。日^{◎◎}は二十一日。時間^{◎◎◎}は正札附午前七時迄に参々伍々て会場と定つてある。墨田園へ集合するといふ振れ込みであつた。其処で明日丈けは日本晴か欲しいとは。何しろ七百余名の学生か。天気に対しての希望であつたか。兎角物事は落第が多いので。二十日夕暮時になると墨壺を覆へしたと一般に真暗になつてしまつた。人々は二週間程前から楽しんだ甲斐ないと。万返なく愚痴をこぼした事は。万更でもなさうな。

眠るものは茲に醒めざるを得ず。醒むるものは茲に往かざるを得ざる。二十一日といふ俟ちに俟つた今日唯今。皆早く起きたさうで。而も天気を眺めたさうた。然り而して。と出るとチト堅すぎるが天気は日本晴といふ迄には行かねと青つべらな天を薄つべらな雲か。処またらに引はへてあつて戻つて運動するには日陰で結構といふ。運動会の詠日和なりけりて。委員共か三味線堀を腕車でボンつかせて往く時分には。早起な太陽は。淡く日光を漏らして居つた。

委員は墨田園へ着くと。旭組と云ふ裝飾会社の人夫共を。彼地此地と世話を云つて会場へ。土俵。撃剣場。競走場。幕旗。委員詰所。講師院友詰所。賞品授与場。をすつくり仕繕らつて仕

舞つたが。時刻か七時と云ふになると。雲か霞かの群り集つて来る如くに。予て会員へ分つてあつた。紅白運動帽の会員連は。さしも広濶と称へらるゝ。墨田園へ集合して。天然の緑の筵を填めてしまつた。学生には運動会と云ふ。休業日はあるものを地球の運転には。暫時の休業も許されぬ、自然的法則か布かれて居るのか。七時と云ふ時刻か来た。すると西隅の楽隊の屯所から嬌音嘹唳と起つて。人の耳を倚たてしめ。恰も黄鳥の春花に囀る如くて。雅韻の所もあり。勇壯な節もある。面白い音楽か始つた。すると委員の詰所から。一人の紫白の帽を冠つた。丈の長い巾の狭い人か。第一号鐘を鳴らせた。すると音楽は止んだ。今迄聴きとれて居た会員は動き初めた。其筈さ第一号鐘か鳴ると。余興か始まるからた。

(生徒の部)

- | | | | |
|------|---------------|-------|-------|
| 第一号鐘 | 徒競走五百ヤード | 一等受賞者 | 中野吉兵衛 |
| | | 二等 | 遠藤長次郎 |
| | | 三等 | 永井定 |
| 第二号鐘 | 載囊スプリング但五百ヤード | 一等 | 熊倉六三郎 |
| | | 二等 | 宮城榮三郎 |
| | | 三等 | 大島庄太郎 |
| 第三号鐘 | 盲目球拾競走 | 一等 | 須藤音次郎 |
| | | 二等 | 中野精一郎 |
| | | 三等 | 小竹雄 |
| 第四号鐘 | 撃剣 | 一等 | 鈴木禮太郎 |
| | | 二等 | 原田繁藏 |

右の各戯は午前八時から始めて正午十二時迄に終つてしまつて。兵糧を会券と引替に渡し。午后一時迄は休憩と昼食に充て、しまつた。

第五号鐘 相撲

- 一等 七戸源次郎
- 二等 眞田藤次郎
- 三等 福永哲男

第六号鐘 放鳥

(講師院友の部)

第七号鐘 徒競走

- 一等 村田崑彦
- 二等 羽生法学士
- 三等 山村郁作

右が了て。幹事太田資時君より。夫々へ賞品の授与があつてそれから。

(講師院友生徒の部)

第八号鐘 福引

右は午后一時から始まつて。五時迄に全く終りを告げ。夫れから一同へ菓子と「スルメ」と酒を振舞つて。散会を告げたが。其の各余興の中で。汗背に浹ふして鼻尖滴りをなさんとすと云ふ程人に拳を握らせたのは。徒競走。撃剣相撲で。靴を隔て、痒きを搔く底の何んだか爪先きへまでエレつかせたのは戴囊スプリンレス。盲目球拾競走で。仁者の側面から観察すると君子は庖厨を遠さく。勇者の側面から観察すると勇壯無比とか。獅虎の嶋を負ひ餓鷲の雲間を翔るか如し。とも評すへき。放鳥競

奪は殊更。活々潑々を觀しられたか。元來羅馬の盛都は一日てならず今日の盛會を極めたも委員長や幹事や委員か骨を碎て。其措置宜しきを得たと學生諸君が眞の運動會の範圍を守つて。遊ふと云ふ限界を去らざる。御奉公の結果と。加ふるに。講師院友が費用を共助せられた。深厚なる恵みの光に照らされた所以てあらゆる珍敷からぬ日張眉軒的事実や。「スツタモンダ」的事件の一つも持ち上らず。和氣藹然として。清福樂悦に。上より下に至るまで。始より終に至る迄。集より散に至る迄。常に円満を保つて。大団円を告ぐるを得たのは。法学院万歳。万々歳を謳歌せねはならぬ事と確信する。此會の委員長には藤田隆三郎君幹事には太田資時君委員の面々は左の如くと聞へし

- 岩淵仁平 所澤貞太郎 太田與一郎 大知新太郎
- 渡辺龜五郎 渡邊徳造 川部夾助 中野吉兵衛
- 内藤諒太郎 野本古 久保田良行 山合龜次郎
- 山縣直道 山口倭馬 松永和一郎 藤澤秀彦
- 坂本愛之 宮崎三郎 篠原泰助 須藤音次郎

(久保田天南記)